

三川分派地区

(バス車内での説明：庄内井堰付近)

浅見委員 先ほど防災ステーションのところ、揖保川の中流と下流との境はどこか、ということをお聞きしました。山崎を越えると平野部が広がってきてもう下流ではないかとおっしゃられていましたが、かなりいい線をついていらっしゃると思います。というのは、平野部に入ると、今右手に見えてますようにエノキとかムクノキの林が出てきます。このエノキ・ムクノキの林というのは、先ほどの丸石河原よりもさらに大体1mぐらいよりも高いところに成立するものです。これは大体30年とか60年とかに1度ぐらいの大洪水が来た時に林が潰れて、また植生が戻ってくる。そのうちにまたやられて、また戻ってくるというようなことがございます。姫路市史でまとめられている自然堤防の場所に色が塗られている地図があるのですが、その場所と神社林のかたちで取り込まれて平野部にポツンポツンと残っているエノキ林の場所とか、すごくきれいに一致しています。姫路市史を編纂した人はもしかして、エノキ林の位置を自然堤防として塗っているのではないかと感じてしまうぐらいよく一致しています。

ここの真ん中に見えるエノキ・ムクノキ林は、実は兵庫県の新しいレッドデータブックのほうでCランクに位置付けられることになっています。というのは、平野部に残されたエノキ・ムクノキ林、神社林なんかによくあるものは、堤防で川から守られているところに残ったことになり、どんどん遷移が進んで林内が照葉樹林化しています。それに比べましてこちらの中洲のエノキ・ムクノキ林というのは、大出水のたびに何度も流されていますので、照葉樹はあまり発達しておりません。資料に写真を入れていただきましたが、林内に草が茂ってしまっていてすごく明るい。まるでキャンプ地、避暑地に行ったかのように木漏れ日が落ちてきますし、中は草が茂っていて明るい感じがしています。本来ですと河川の氾濫原に残っている、こういう明るいエノキ・ムクノキ林というのは、最近ではほとんど見かけることができません。というのは、堤内側に残されるか、もしくは堤外側の場合はコンクリートで固められたりして、出水の影響を受けることなく照葉樹がどんどん混ざってきているからです。ここは畑のあとにできたエノキ・ムクノキ林なのですが、揖保川のエノキ・ムクノキ林だなという特徴があります。どういう点かと言いますと、この中をよく見ると、トチノキだとかハウチワカエデといったようなブナ林の要素のものが出てきます。これはやはり上流に福地溪谷、赤西溪谷などすごく立派な自然林が残っているところの要素が流れついて、ここに出てきているということです。つまり揖保川の上流部にそういうすばらしい林が成立している揖保川ならではのエノキ・ムクノキ林なのではないかなと思います。こういったことがこの三川分派地区の1つの特徴です。

それから先ほども言いましたように、水が引いた時にポツポツと断片的ではありますが、汽水域の植生、河口部の植生が見られることです。横堰のあたりは湧水が湧いてきていますので、止水性の魚類、タイリクバラタナゴとかヤリタナゴなども出てきますし、緩い流れが好きなトンボ類だとかもたくさん来ています。もう1つ、三川分派地区の上流部のほうに丸石河原があります。

これは中流の景観ですよとさきほども言いましたが、その川原が三川分派地区の先端部のところにあります。時々大出水で洗われますので、その部分に断片的ながら中流の丸石河原が残っています。つまりこの三川分派地区にはエノキ・ムクノキ林のほかに、河口部の景観、それから中流部の景観といったものがすべてミックスされて残っています。これがこの地区の特徴ではないかと思います。

河川管理者 今、浅見委員の方からご説明があった三川分派地区でございますが、河畔林、干潟、アユの産卵場としても豊富な自然環境があります。平成 13 年度からこの三川分派地区の環境整備計画を策定するための検討委員会を設置しておりまして、今年度には結論が出ることを期待しておりますが、自然の保全拠点、あるいは揖保川と人との関わりを見なおす学習交流の場ということで整備していくことを考えております。その中には川の中の水のダイナミズムを復元すること、すなわちずっと乾燥しているところではなくて時々水がかかるというような考え方も入れて、少し掘り下げる、といったことも含めていろいろ検討していただいているところでございます。先ほどお話がありましたとおり、河畔のところの林が非常にきれいなんですが、外から見えないということもありまして、不法投棄の廃棄物が捨てられていたりということも現実に起こっているところでございます。人もなかなか近寄らないところでございますので、そういう問題も同時に抱えております。